第４分科会　研究課題「組織・運営に関する課題」

研究主題　「学校の組織力向上と働き方改革の推進」

～各学校の実情に応じた校務の効率化・人材育成の取組をとおして～

西諸支会 えびの市立岡元小学校　三ヶ尻　和弘

１　主題設定の理由

学校内外の様々な課題に適正かつ迅速に対処するためには、教職員の人材育成や学校の組織的な対応が不可欠である。

一方、教師が児童・生徒と向き合う時間を十分確保するためには、校務の効率化を図り、働き方改革を進めることが必要である。

これらの課題意識をもち研究を進めることにしたが、市内の学校はそれぞれ学校規模や職員構成等が異なり、同様のアプローチでは課題解決が難しいと考えた。

そこで、各学校がその実情に応じて、校務の効率化や人材育成の取組を行うことで、学校の組織力向上と働き方改革の推進をさらに進めることができると考え、本主題を設定した。

２　研究のねらい

各学校の実情に応じて、校務の効率化や人材育成の取組を工夫することで、学校の組織力向上と働き方改革を推進する。

３　研究の概要と成果

各学校の取組や成果、教頭としての役割は、以下のとおりである。なお、本市は小中一貫校もあるため、市内全小中学校の取組を掲載することとした。

(1) 飯野小学校

①　取組とその成果

○　新たな研修制度の目的や意義を全職員に周知し、研修推進委員会を立ち上げ、各ステージそれぞれのゴールを目指した研修の構築に取り組んだ。

○　研修の担当者・受講者の両者とも、１つ１つの研修の意義、目的を認識し、主体的に研修に参加することができた。

○　各校務部との連携も密になり組織力の向上につながった。

②　教頭としての役割

○　研修主任と一緒に研修の年間計画を練り、各校務部長と研修内容等の調整を行った。

○　研修の内容を充実させるために、外部人材との連絡調整や、オンデマンド資料の情報収集などを行い、適宜、研修主任に提案や助言をすることができた。

(2) 加久藤小学校

①　取組とその成果

○　初期研修者が年度当初に学級経営や学習指導、校務分掌等の業務遂行に困難さが見られた。そこで、校長の指導の下、メンターチームとは別に、初期研修者の実務をサポートする「初期研修連絡協議会」を立ち上げ、毎月１回開催している。本協議会のメンバーは、管理職、校内指導教員（教務主任）、学年主任、生徒指導主事、学年部職員である。

②　教頭としての役割

○　まず、初期研修者の業務遂行状況を把握するため、本協議会のメンバーを「学習指導」「生徒指導」「学級経営」「事務作業」等の担当に振り分けた。そして、それぞれのメンバーには、初期研修者に助言することや、ＯＪＴの視点で一緒に業務を行うよう依頼した。毎月の協議会では、それぞれの担当が業務の進捗状況や課題、改善策を出し合った。

(3) 上江小中学校

①　取組とその成果

○　本年度は、各種アンケート（運動会の開催方法、プール開放の有無、学校評価等）を、グーグルフォームを活用して実施した。集計の手間が省けたことで、早期に保護者に結果の周知ができた。

○　主題研究における研究授業では、小中混合で年齢構成等を加味した少人数のグループを編成し、互いの授業を参観した。専門性やきめ細かな指導について研修が深まり、授業力の向上につながった。

②　教頭としての役割

○　グーグルフォームの活用は、教頭が学校代表のアカウントを取得し、申請があれば、各担当が使用できるようにした。

○　主題研究における研究授業は、全職員の授業を参観し、「授業の振り返りシート」で職員一人一人にフィードバックができた。

(4) 真幸小学校

①　取組とその成果

○　校務の効率化をとおした働き方改革の一環で、退庁時刻の申告や会議の精選を行っている。職員が出勤時に、職員室掲示板に退庁時刻を申告することで、教頭はその日の施錠者を確認できるようになった。予め時間外業務を行う職員を把握し、施錠を分担することで、教頭の時間外業務時間を削減することができるようになった。

○　放課後や長期休業中の会議等を精選することで、教材研究や校務分掌業務を行う時間を確保することができている。

②　教頭としての役割

○　若手教職員の資質向上に向け、校舎の施錠時に教室を巡回し、人権教育や安全管理、学力向上等の観点から設営等を確認している。気付いた点をすぐに伝え、翌日からの学級経営に生かせるようにしている。

(5) 岡元小学校

①　取組とその成果

○　これまで週３０時間授業であったため、水曜日の会議等の時間が不足し、一部を他の曜日に行っていた。

本年度は、教育課程を見直し、水曜日を全校５時間授業とした。これにより水曜日は、①終礼（１５分）②会議１（４５分）③会議２（４５分）の実施が可能になった。現在、全ての会議等をほぼ水曜日に実施できている。

○　校務のデジタル化による業務改善を進めた。校内は、会議のペーパーレス化、Ｃ４ｔｈ等の活用による連絡時間の短縮を行った。外部は、アンケート・出欠等をＷｅｂ回答で行った。

②　教頭としての役割

○　会議は、事前に打合せ・資料掲載をして、全職員が所要時間・内容・検討事項を明確にして会議に望めるようにした。時間内に効率的に進めることができた。

○　校務のデジタル化（ペーパーレス化・Ｃ４ｔｈ活用等）の意義を、職員や保護者等に周知して理解を求めた。職員や保護者等のＩＣＴスキルや意見を考慮し、その都度説明しながら少しずつ進めた。

(6)　飯野中学校

①　取組とその成果

○　これまで資料は紙媒体だったが、内容の添削・修正・製本に時間を要していた。本年度は、ポータルサイトに資料をアップロードして会議に臨むことで、会議中でも編集が可能となり、時間も大幅に短縮され職員間での対話が増えた。

○　１校時開始時刻を１５分早め、放課後に「諸活動」の時間を設定した。①学校行事の準備、②職員会議の時間、③学力向上の時間、④教育相談として活用することで、生徒や職員間の対話が増えた。

②　教頭としての役割

○　会議は、事前に議題の柱と所要時間を把握して臨んだ。また、従来校長の話を会議の終末に設定していたが、導入時に変更することで、内容が確実に伝達されるようになった。

○　新校時程の導入にあたっては、企画委員会で慎重に検討を重ね、会議外でも主任等と対話をした上で校長と情報整理をした。放課後は、教頭も積極的に関わることで、学校の問題把握ができ、助言もしやすくなった。

(7)　加久藤中学校

①　取組とその成果

（異校種連携に関すること）

【対話型キャリア教育プログラム「ひなた場」】

○　県キャリア教育コーディネーター２名をファシリテーター、飯野高校３年生（２２名）を地域の先輩、として招聘し、本校３年生（４４名）と高校生の混成の小グループ（４～５名程度）に分かれ、お互いに人生を語り合った。このことをとおして、憧れのロールモデルを見つけたり、気軽に相談できる少し年上の地域の先輩との関係をつくったりする等、自分の将来を深く考え、思い描くことができた。

②　教頭としての役割

○　キャリア教育の視点を踏まえ、本取組で育成したい能力や態度を学年団に設定させ、学年団の意向に沿いながら指導・助言を行った。また、年主任と高校担当教員との事前打合わせも計画的に行わせ、縦の連携も綿密に行った。

他校種との連携した取組を充実させるためには、管理職がリーダーシップを発揮して、全職員で教育的意義についての共通理解を図り、取組の重点や順序を明確にして、校内での推進体制を整備していくことが重要である。

(8)　真幸中学校

①　取組とその成果

○　通信、行事等の案内文書配付や出欠状況の確認、学校行事等の反省や動静表の作成、校内におけるペーパーレス化など多岐にわたり、ＩＣＴを活用することで、校務の効率化を図っている。職員がグーグルフォームなどのアプリを使う場面が増えている。

○　校内研修において、研修動画を積極的に活用し、人材育成を行っている。わざわざ講師を依頼しなくても専門的な話を聞くことができ、資質向上の一助となっている。

②　教頭としての役割

○　グーグルフォームの使い方など、簡単にペーパー化して、職員に提示している。また、校内研修のプレゼン資料を、複数のソフトで作成して、職員に紹介している。

○　宮崎県研修センターやＮＩＴＳ等の研修動画をこまめにチェックし、職員に紹介している。

４　今後の課題

○　校務の効率化

本市は、県校務支援システム（Ｃ４ｔｈ）と市校務支援システムを併用しているため、確認する箇所が多く、情報の伝達や入力が滞ることがある。今後、情報確認の習慣化を図る手立てが必要である。また、システムの一本化についても市に要望していきたい。

○　人材育成

教頭は、校内で人材育成を進めるコーディネーターである。日頃から対話や観察をとおして、職員の力量や悩み、キャリアデザイン等を把握する必要がある。また、校内研究をはじめ業務を推進するにあたって、教頭として、ＯＪＴが機能するよう、常に情報収集や連絡調整・指導助言をする必要がある。